会報No. 436

子どもの本 研究会

【私の一冊】　『13歳からのアート思考』　末永幸歩　著（ダイヤモンド社）

平野　修

私は、小学校の時から一番苦手な教科は国語でした。なぜ、苦手だったかというと、物語や詩の読み取りのテストなどで、「この作者は、どんな気持ちでこの詩を書いたのでしょうか」とか「主人公の気持ちはどんなだったでしょうか」という質問に対して、自分の答えを書くと×が戻ってくるのです。なんで、自分が感じたとおりに書いて×になるのか、その時の私には理解ができませんでした。テストでは、最初からこの詩はこう読まなくてはいけない、この主人公はこんな気持ちだったと答えが決まっていて、それにあった読みをしないと○はもらえなかったのです。読み手がどう感じたか、どう解釈したかは関係ないのです。そのことにとても違和感を感じて、国語はどうしても好きになれませんでした。

そんな自分に勇気を与えてくれたのがこの『13歳からのアート思考』という本です。アート思考とは、上手に絵を描いたり、美しい造形物を創ったり、歴史的な絵のウンチクを語れるようになることではなく、「自分だけの視点」で物事を見て、「自分なりの答え」をつくり出す思考のことを言います。アーチストが目に見える作品を生み出す過程①「自分だけのものの見方」で世界を見つめ、②「自分なりの答え」を生み出し、③それによって「新たな問い」を生み出す。こうした思考プロセスをアート思考といっています。

自分が学生の時に、国語の授業で違和感を感じ、嫌になったのは、「自分なりの答え」が全く認められなかったことにあるのかもしれません。今、アート思考はビジネスの世界において、とても注目されている思考です。作者は、「じっと動かない1枚の絵画を前にしてすら『自分なりの答え』をつくれない人が、激動する複雑な現実世界のなかで、果たしてなにかを生み出したりできるのでしょうか？」と問うています。

『13歳からのアート思考』と本の題名はなっていますが、実は、凝り固まった思考になっている我々大人こそが読むべき本であると感じました。ぜひ、手に取って読んでみてください。

（熊本市立帯山西小学校　校長）

2021年11月23日（火）特定非営利活動法人　熊本子どもの本の研究会　発行
http://www.kodomonohon.org　E-mail: info@kodomonohon.org

追悼　横田幸子さん

熊本子どもの本の研究会の創設者で前理事長の横田幸子さんが9月21日、熊本市内の自宅で永眠しました。82歳でした。横田さんは1971年11月に自宅で家庭文庫「びわの木文庫」をスタートしたのを皮切りに、西原4町内公民館で地域文庫「にしばる文庫」を開設。83年に「熊本子どもの本の研究会」創設につなげました。その後も「昔話を楽しむ九州交流会」を発足させる一方、県内各地でお話ボランティア活動や地域文庫の種をまきました。研究会事業として、鶴見俊輔氏、谷川俊太郎氏、大岡信氏、池澤夏樹氏、工藤直子氏らを招いた記念講演会の開催にも熱心に取り組み、その成果は『神話的時間』『子どもがみつけた本』など5冊の書籍として出版されました。

横田さんを偲び、会員や関係者の方々の追悼文を掲載します。

40年にわたる地道な「研究会」活動

小川　芳宏（熊本県文化協会常務理事）

子どもさんたちに読書の楽しさ、喜びを知ってもらいたいとの思いから「熊本子どもの本の研究会」を立ち上げ、約40年にわたって地道な活動を続けてこられた横田幸子さんが天国へと旅立たれました。心から「ご苦労さまでした」と哀悼の言葉を送りたいと思います。

幸子さん（敢えてこう呼ばせていただきます）とは、玉名郡睦合村（現玉名市代官町）の同郷で玉名高校の同窓でもあります。ご主人の横田孝氏は同じ玉高の理科教師をされており、3年時に担任をしていただいた私の恩師です。

要するに横田先生が美少女だった教え子の幸子さんのハートを射止めたわけで、当時学校中の話題となったことでしょう。

ご主人亡きあと、事あるごとに相談にのってきました。会の名称についても、NPO法人ではなく特定非営利活動法人にしたいが、いかが？とか。また、情報誌『みんなあつまれ』創刊（1994年）に際し、専門家の意見を聞きたいと言うので、商業デザイナーの松木良介氏の事務所におられた西崎節子（現小原節子）さんを西原のご自宅兼会事務所にお連れして夜遅くまであれこれ企画やデザインを検討しました。

翌年1995年に、子どもの本の研究会が発刊した『神話的時間』は充実した内容で、当時大きな反響を呼びました。鶴見俊輔氏や谷川俊太郎氏ら名だたる先生方が寄稿されていたので当然でしょう。

ある時、幸子さんから突然電話がありました。体力的に自信を失くされていたのか、「小川さん、長男の真にバトンタッチするまでの間、理事長職を引き受けてもらえませんか」という相談でした。即座に「私はその器ではないので、あなたがもう少し頑張ってご長男に直接理事長の座を渡しなさい」と激励しました。

私の思惑通り、真氏が理事長となり、亡き母の遺志を継いで、新しい感覚のもと、会の発展に尽力されほっと一安心です。

研究会発足の翌年（1984年）に創刊された機関誌『初蕾』は順調に伸び、会員の皆さんも全国各地に広がっています。

幸子さんには、生前ホテル日航熊本で催された拙書の出版祝賀会や、荒木精之記念文化功労者顕彰式には必ず駆け付け、壇上で花束を頂きました。長年の友情に感謝します。

研究会には有能なスタッフが多数おられます。私も副理事長として、微力ながら理事長のお手伝いをしていきたいと思っています。

「チケットではなく文化を売っている」

古上　美智代（研究会会員）

横田幸子さんがご逝去され深い悲しみに包まれています。

出来上がったばかりの会報を満足げに見られる姿、最愛のご主人の話をされる時の優しい笑顔、そして強いものにも決して媚びることなく向かって行かれる強い姿がまぶたに焼き付いています。

私は子育てサークルを通じて、あるおはなしのグループに入会しました。そこで「本やおはなしのことを学びたいなら研究会（熊本子どもの本の研究会）にも入ったほうがいいよ」と勧められました。早速開講式へ。そこにはテキパキとスタッフに指示される横田さんや、きびきびと動くスタッフの姿がありました。講座の質も高く、読書派とは言えない私がこの会でやっていけるのかしらと不安でした。しかし、そんな私を横田さんは、温かく受け入れてくださいました。

会の代表としての横田さんは、妥協を許さず、厳しくもありました。それは、熊本の子ども達の読書推進のため、そして、熊本の文化向上のためで、本当に一生懸命でした。

会の節目には盛大な記念事業を行ってきましたが、そのチケットがなかなか売れない私たちに「私たちはチケットを売っているのではないのです。文化を売っているのです」と、毅然とした態度でおっしゃっていた姿は忘れられません。その強い熱意のおかげで、熊本にいながら多くの著名な作家の方々の講演を聞くことができました。そして、大変緊張しながらお話やお食事をすることもできました。大変貴重な体験でした。

熊本県内のお話の交流会、九州交流会と各地をご一緒できたのも、とても楽しい思い出です。

横田さんとの出会いから二十有余年、私の人生をこころ豊かなものにしていただきました。本当にありがとうございました。

ご冥福を心よりお祈りいたします。

「さっちゃん」の笑顔

菊島紘子（研究会会員、横浜市在住）

横田　幸子様　もうお会いできないのですね。悲しいです。

横田さんに初めてお会いしたのは16年前、東京子ども図書館のお話の講習会でした。受講したメンバーはそのまま別れがたく、年1回の同窓会をすることにしました。

２０１２年の山梨の会の帰りでした。私は夫が術後間もなくだったので一足早く帰ることにしました。横田さんも帰りを急いでいたので、ご一緒しました。横田さんは、車中で夫の病気を心配してくださり「私も胃は半分しかないのよ。でも、残った胃が良く働いてくれるので、たくさん食べられるの。食べないと体力付かないものね」。力強い言葉でした。そして、熊本子どもの本研究会でおはなしを語らないかと誘ってくださいました。

２０１３年、バーネットの研究家三宅興子先生とご一緒させていただきました。翌14年「くまもとおはなし交流会ＩＮ産山」に誘っていただきました。とても大きなイベントで、主催者の横田さんはさぞかしお疲れだったでしょう。

横田さんがご自宅で開いている「びわの木文庫」はご近所の親子さんがいらっしゃって、本を読んだり借りたりしていくそうです。本の冊数はとても多く、吟味された良書ばかりでした。おはなし会は広い居間で行いました。その日の工作はパネルシアターで「さっちゃん」でした。

♪♪　サッちゃんはね　サチコっていうんだ
ほんとはね　だけどちっちゃいから　じぶんの

こと　サッちゃんて　よぶんだよ　おかしいな
サッちゃん　♪♪（坂田寛夫作詞　大中恩作曲）
この歌が元になっています。

さっちゃんはアイスクリームを10本、スイカを丸ごと30個も食べます。横田さんは「私のことね。おんなじね」と笑っていました。

新型コロナで子ども達にお話会が出来なくなりました。そこで私が通っている小児病棟の子ども達に「お話会」のＤＶＤを作りました。「さっちゃん」のパネルシアターも入っています。横田さんにこのＤＶＤのさっちゃんを見て頂きたいと、横田真理事長にお願いしました。今年8月初めごろ、「ｉｐａｄで見ていましたよ」とお知らせいただき、よかったと思いました。「私のことね」とおっしゃったかしら。

心からお悔やみ申し上げます。

後世に引き継がれる文化活動の創始者

今井　康之（元岩波書店代表取締役専務）

横田幸子さんは終生一筋の道を歩き続けました。

活動の視点が実に広く、熊本市から県内へ、やがて九州全県へ、さらに沖縄まで広げて下さいました。元はと言えば、自身のお子さんたちに読み聞かせした一家庭の親子読書が起点でした。本を読む活動をこのような規模で活性化してくださったのは横田幸子さんの他に知りません。後世に引き継がれる立派な文化運動の創始者であります。

20周年には熊本に呼んでいただきました。鶴見俊輔さん、谷川俊太郎さんも一緒でした。日本を代表するこのビッグたちが、我がことのように「熊本子どもの本の研究会」活動を応援して下さいました。

岩波書店も社として支援してきました。これは全て横田さんの活動趣旨に賛同し、お人柄に打たれたからです。

横田さんが上京して岩波書店の門をくぐれば、編集部、宣伝部などの昵懇社員が取り囲みました。熊本市出身の高村幸治編集部長は率先して講師への講演依頼や刊行企画の相談に乗りました。

本ができる時分になると、横田さんと今井で東京の取次店に全国配本や歩合の交渉に行きました。売れたので苦情は出ませんでした。

誠に見事なご生涯でした。ゆっくりお休みになって下さい。謹んでご冥福をお祈りいたします。

オンライン会合

児童書の古典を読みなおす会&

横田幸子さんを偲ぶ

日　時　10月3日　10時～12時
参加者　5人

○横田さんの思い出

・会がここまで大きくなったのは幸子さんの行動力によるもの。苦労をいとわず走り続けた。

・イベントのテーマの選び方など、類いまれなるセンスをもっていた。研究会の冊子『初芽』の表紙の絵を高校の美術部の学生に依頼するようなアイデアはなかなか思いつかない。

・幸子さんは良いと思ったことを純粋な気持ちから躊躇せず行動する。会報の「食卓の周辺」を毎回楽しみにしていた。

○読書に関する環境の変化

・読み聞かせなどは小学校の低学年が主たる対象だが、小学校高学年や中学生にも本を読む楽しみを伝えたい。

・絵本から物語、読み聞かせから自分で読むという転換点をスムーズに超えられるかがカギ。

・本好きの児童がオンライン講演会で知り合った共同通信のワシントン支局の方にクリスマスカードを書いたら返事が来てやりとりが始まっ

た。こういうことをきっかけに子どもの世界は広がっていく。

○オンライン会議について

・本の紹介などに使っていきたい。

・初めからオンラインだと信頼関係を築きにくい。オンラインは対面で信頼関係を築いた後の延長線上にあった方がやりやすい。

○裏方仕事について

・3年前の今村華子さんのイベントは、会員自身が話を聞けるイベントにしようと100名程度の会合とした。それ以上に大きなイベントだと、会の企画者は裏方になってしまう。

・子どもの本の研究会で裏方をいろいろやった。裏方をやることの楽しみもあった。

・皆でワイワイとやるのが楽しかったが、いつのまにか負担感のある作業になってしまった。

○『モモ』について

・50年近く前の本だが、拝金主義、効率主義を風刺する本としてその意義を深く感じた。

・少女モモは文字を知らない。両親がいない。家がない。劇場に住んでいる。物事の本質を体で受け取る、つまり自然と交歓できる。モモは自然のリズム（時間）の中で生きている。時計が刻んでいく時間（クロノス）と、主観的時間、タイミング、チャンスなどに関する時（カイロス）の違いを教えてくれる。

・古典的な童話の世界と、SFっぽい世界がうまく融合している。一つ一つのシーンが魅力的な映画の映像のよう。

・面白くて大好きな話。特にモモと子どもたちが想像の世界で遊ぶ航海ごっこのシーンがいい。船の描写は3D映像のようで、子どもの話す言葉はコンピュータのコードを思わせる。作者はまるで近未来を予想していたかのようだ。

・モモの周りでみんながおしゃべりしている時間が重要。人生100年時代への対応を考え、息子がそのようなコンセプトの老人ホームを運営している。　（報告　上林雅子・横田真）

◆講座　語りと絵本の持ち寄りパーティー

日　時　10月6日（水）10時～12時

会　場　くまもと県民交流館パレア会議室

参加者　7人

○プログラム

①ろうそくのうた

②詩「おちば」（『ワイズ・ブラウンの詩の絵本』マーガレット・ワイズ・ブラウン詩、木坂涼訳、フレーベル館より）　木村　一憲

③語り「屁ったれ嫁さん」（『みちのく民話まんだら―民話のなかの女たち』小野和子、北燈社より）　黒田真由美

④朗読「笑う能力」（『倚りかからず』茨木のり子、筑摩書房より）　堀畑真紀子

⑤語り「月を射る」（中国の昔話、君島久子訳『おはなしのろうそく27』東京子ども図書館より）　藤田美津代

⑥語り「ものいうたまご」（『アメリカのむかし話』渡辺茂男訳、偕成社より）　辻　由美

○本の紹介

・倉岡寿雅子より

『夜あけ朝あけ』住井すゑ（理論社）

小学1年生から3年生までの担任の先生は本をよく読んでくれた。この本は、戦争で父を、病気で母を亡くした兄弟が苦しい生活の中たくましく生きていく姿を描く。先生は紙芝居バージョンを読んでくれたが、タイトルと内容は心に残っていた。先日、びわの木文庫でこの本を見つけ、作者が『橋のない川』の住井すゑだったことも知り、改めて読み直している。

・有久賢治より

『マルガレーテ・シュタイフ　テディベア神さまからの贈り物』ウルリケ・ハルベ・バウアー

著、田口信子訳（東京新聞出版局）

『マルガレーテ・シュタイフ物語　テディベア、それは永遠の友だち』磯みゆき著（ポプラ社）

伝記物とは違う物語のようなノンフィクション。1847年、ドイツに生まれたマルガレーテは1歳半の時に高熱を発症し脊髄性小児まひに罹患、両足と右手に障害を負う。19世紀は女性にとっても障がい者にとっても恵まれているとはいえない時代だったが、諦めない不屈の精神で人生を歩んだ。世界中で愛されているシュタイフ社のテディベアは、「子どもには最良のものを」という思いから生まれた。

《参加者の感想》

▼「おちば」で秋らしく始まった。〝夏をなつかしむ秋〟というのが今の時季に合っていた▼言葉が響きとともに心に訴えかけてくる。それがお話だと思った▼子どもたちの前でお話ができない状況が続くが、お話をしっかり取り組む時間にしたい▼「ものいうたまご」は、語りたいと思って2年間手元にあったお話▼突拍子もない状況や展開を見せる昔話が楽しい▼詩からいい言葉のシャワーを浴びている▼テディベアの本は、紹介されないと出合えなかったと思う。読んでみたいと思った。

＊

講座を始める前、横田幸子さんに黙とうをささげました。ご冥福をお祈りいたします。

おはなし会で灯すろうそく（電池式）の横に置いていたのは、小さな手作りのテディベア風のクマの人形。テディベアの本が紹介され愛おしく眺めました。声が温かさをもって漂うかの会場は、久しぶりに味わう心地良い空間でした。

（報告　木村一惠）

オンライン会合

第4回研究会活動検討会

日　時　10月10日（日）10時～11時40分

参加者　3人

○子どもへの機会の提供、読書促進

・子どもが読んだ本について大人と話す機会を持ったらもっと本に興味がわくのではないか。子どもにさまざまな分野で活躍する人の話を聞かせる機会を提供することも意義がある。

・今は簡単にオンラインイベントを開くことができる。

・我が家の子どもは、読み聞かせから自分で読むことへの転換がうまくいかなかった。

・それは研究会活動における永遠の課題。ただ、会員の子供達は本を読む子が多い。親が子供のテレビやゲームの時間をコントロールしないと読書の時間は作れない。

・子どもから本に対する関心など直接話を聞く機会を検討しよう。

（報告　横田恵美）

◆講座　ナンセンス絵本を味わう

日　時　10月20日（水）10時～12時

会　場　くまもと県民交流館パレア会議室

参加者　6人

レポーター　木村一惠

■ナンセンス・ナンセンス文学とは

英語で意味のない、ばかげたこと、ノンセンスと定義される。言語伝達される通常のセンスの否定によって生まれた作品はナンセンス文学と言える。英国は『マザーグース』『不思議の国のアリス』等ナンセンス文学の宝庫である。日本も『万葉集』を始め童歌、早口言葉、狂歌、川柳など民衆的伝統がある。（ブリタニカ国際大百科事典より抜粋）

■ナンセンス絵本5作品の面白さの秘密

○『ぶたのたね』佐々木マキ　作・絵（絵本館）

ぶたより足が遅いオオカミという常識の逆転。ぶたを食べたいオオカミがキツネ博士製造のぶ

たのたねと早く育つ薬を得る。ぶたは木に生ったが、ゾウのマラソン大会で落下し、ぶたは逃走する。オオカミの思い通りにならない滑稽さ。

○『こんにちは！へんてこライオン』

長新太　作・絵（小学館）

しんくんとゆうちゃんが道でライオンと出会い、怖いはずのライオンがウサギ、てんぐ、ドジョウ、バレリーナ最後は橋へ変身し、川渡りを助ける。各シーン「へんてこなライオンのおはなしです」の言葉の繰り返しが心地よい。

○『キャベツくん』長新太　文・絵（文研出版）

道でキャベツくんをお腹の空いたブタヤマさんが食べたら?「こうなる」「ブキャ！」とヘビ、タヌキ、ゴリラ、カエル、ライオン、ゾウ、ノミ、クジラに変身、最後はレストランに案内する奇想天外な設定。どこかにキャベツの色形が現れる。

○『ころころにゃーん』

長新太　作・画（福音館書店）

ころころ音を出す飛行機に満員の猫がにゃーんと鳴く不思議。「ころころにゃーんころころにゃーんと、ひこうきはとんでいきます」を14回繰り返し、最後の「ただいま」は斬新。

○『きゅうりさんあぶないよ』

スズキコージ　作（福音館書店）

きゅうりさんは出会う動物から一つずつもらった持ち物で武装し、強くなる。「きゅうりさんそっちへいったらあぶないよ　ねずみがでるから」を9回繰り返し、最後はねずみの「あぶない！」で終わる。ねずみ退治の英雄として銅像になったきゅうりのシュールな結末は子どもの心を打つ。

■作者自身の考えと専門家の見方

・長さん、佐々木さんは漫画から絵本作家になり、2人の根底に笑いがある。

・長さんはアニミズム思想が土台にあり、ユーモアを加え普遍性を持たせる。ナンセンスに意味を聞かれても答えられないと言う。

・佐々木さんは子どもが不条理やナンセンスを好むのは、子ども自身1人で生きていけない不条理な存在だからと言う。

・俵万智さんは子どもが5歳で『ぶたのたね』を読み、ぶらさがるぶたに新鮮な驚きと笑う感覚を得た。常識で固まった心が揺さぶられた。

・中村柾子さんは、大人はつい訳を考えがち、絵本世界に溶け込み一体感を楽しむ。

・清水真砂子さんは、子どもは経済的に自立困難な存在、絵本から勇気を得て辛さや不条理も取り込んで成長する。

《参加者の感想》

「ブキャ」が面白い。子どもの姿を捉える感性はさすが、それを知った絵本作り。読んでもらう心地よさ、不思議な感覚▼「バーパパ」が浮かぶ。キャベツくんを吸収し何度も変身するライオンに疲れる年齢、意味を求める大人と実感▼『ぶたのたね』は具象の様で抽象表現の面白さ、言葉と絵の合体、ぶたは弱くおおかみは強い概念の解放、子ども時代に触れて欲しい▼繰り返しがあり筋もある話が好み、小さい頃のセンスを持ち続けたいが、忘れていた感覚。『きゅうりさんあぶないよ』の展開に納得。変身ならばアニメで流行の「無限列車」も鬼が列車の姿になる▼谷川俊太郎の随筆「理由なき喜び」に「子どもは理由なく笑う、大人は理由を考えて笑う。そんな子どもの心を大切にしたい」とある。ナンセンスは奇想天外で論理性のないもので原点は『マザーグース』やエドワード・リア『ナンセンスの絵本』『五行俗謡』で韻を踏み、後の文学に影響を与えた▼作家の破天荒な感性、芸術センスが面白い作品を生むとの感想もあった。

（報告　有久賢治）

12月・1月の講座・会合の案内

○昔話のおもしろさ―くり返し
・日時　12月8日（水）10時～12時
・会場　熊本市立図書館集会室
昔話が持つ「くり返し」について考えます。「くり返しがある」と思った昔話を持ってご参加ください。

○語りと絵本の持ち寄りパーティー
～テーマ　・春～
・日時　22年1月19日（水）10時～12時
・会場　熊本市立図書館集会室
「春」をテーマにお話、絵本、小道具…持ち寄って楽しみましょう。

★参加には事前申し込みが必要です。講座名、参加者のお名前、連絡先を明記の上、メールかFAXで。
メール　kouza(a)kodomomohon.org
FAX　096-382-5090

○第5回研究会活動検討会（オンライン）
・日時　12月12日（日）10時～12時
研究会活動の企画や意見交換をします。参加希望の方はメールで12月10日までにお申し込みください。
メール　zoom(a)kodomomohon.org
（共に(a)を@に変えてアドレスにして下さい）

本はともだち！

9月21日夕方、母（横田幸子）は、西原の自宅のリビングで、私達兄妹が見守る中で旅立っていきました。食べることができなくなったのを機に、妹が9月13日に自宅に連れ戻って1日2回の訪問看護のサポートを受ける形とし、16日には私も熊本に行き、最期の1週間を3人で過ごしました。住み慣れた場所で子ども達が囲む中での安らかな旅立であったことは、母にとっても私達にとっても幸せであったと思います。

子どもから見て、母の人生の転機となったのはジョンソン&ジョンソンの奥様使節団に選ばれ、素晴らしい仲間と一緒に米国旅行をしてきたことだと思います。高3（私）と中3（妹）という受験生を置いて、喜び勇んで出かけていき、それから母の活動は一挙に加速しました。熊本子どもの本の研究会の発足はその5年後です。それから40年ちかく、皆様のご支援、ご協力の下、充実した日々を母は送ってこられました。本当にありがとうございました。

母は研究会以外でも活動的で、海外にもよく出かけていました。『地域活動の魅力』に旅行記が収蔵されている北欧旅行は、英語をまともにしゃべれない60代女性2人が自分で計画した旅程で回るというチャレンジングなものでした。ラスベガス・グランドキャニオンの旅、亡き弟と3人で行ったウルムチ、敦煌、西安の旅、瀬戸内国際芸術祭を見る四国の旅など、よく一緒に旅行もしました。妹家族、私達夫婦と京都の旅館で正月を迎えたこともあります。家計が決して豊かではない中でも、旅行に加え、家の増改築、本、服、絵など、人生を楽しむための支出を惜しまない人でした。

2016年の熊本地震の時に私がたまたま熊本に居たことは、本当に幸運でした。母は私がそばにいることで安心していました。しかし、震災を機に母の気力と体力は衰えていきました。やりたいことはやりつくした感があったのかもしれません。

皆さまと一緒の活動を通じて幸せで充実した人生を送り、私にとっても生き様の手本になる人でありました。（横田　真）

■編集＝池田・金子・上林・横田
《イラスト》安田

特定非営利活動法人
熊本子どもの本の研究会　発行
〒861-8029
熊本市東区　西原1丁目15の24
FAX　096（382）5090